

礼拝：2021年9月5日（日） 聖霊降臨節第16主日

賛美：賛美歌202

交読：詩編147編1～7節

聖書：エゼキエル書37章15～28節

マタイによる福音書18章10～20節

説教：「信仰による絆」 佃 雅之

今朝の礼拝では、福音書記者マタイの伝えるキリストの語られた二つの説教を取り上げます。この二つの説教を繋ぎ、今日の箇所の主題となっているのは、14節にある「これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。」と言われたキリストの言葉です。「これらの小さな者」とは、今、礼拝を献げている私たち一人ひとりのことを指しているのは明らかです。「これらの小さな者の一人」にキリストは焦点をピタリと合わせています。キリストの教会に属する者は、誰一人滅びてはならない。そのためにあなたがたは、天の父の御心を行わなければならない。天の父の御心を行うことこそが「私が教会に与えた使命だ」とキリストは言います。しかし、教会には色々な人が集います。この世界もそうですが、教会もまた色々な人が混じり合っているから、そのために違いがあり、色々な問題が起こります。時に「迷い出る」者があり、時に「兄弟が罪を犯す」ということが起こります。教会は迷い出た者が、また罪を犯した兄弟が減びないために、どうしたらいいのでしょうか。何をすることが出来るのでしょうか。キリストが語られた説教に散りばめられた言葉から、私たち教会がすべきことを聞き取りたいと思います。

キリストは「迷い出た羊のたとえ」で、百匹のうちの一匹が迷い出たと言われます。ここには、その一匹の羊が迷い出た理由は書かれてはいませんが、当時のユダヤでは実際に羊がよく道に迷ったのだそうです。主な理由は、牧草です。牧草は狭い草地に、まばらに生えていました。羊は牧草を求めて動き回ったのでしょう。狭い草地には柵のようなものはなかったため、羊が食事を求めて不用意に群れを離れるようなことがあれば、峡谷に落ちてしまう。一端落ちてしまったなら、その谷底は深く、自力で登ってくることは不可能でした。食欲に負けて命を落とす。誘惑に負けて群れから離れる。私たちにも注意が必要な事柄です。迷い出た者を「これらの小さな者の一人」とキリストは言いました。私たちの誰もが小さな者の一人ですから、私たちも、きっと色々なことに迷い、時に迷い出ることがあるでしょう。誰もが迷い出る可能性のある私たちです。その時、教会はどのようにすべきなのか、私たち一人ひとりはどうしたらよいのか、私たち自身のこととしてどう思うか考える必要があります。

キリストは、一匹の羊が迷い出たら、捜しに行くと語ります。迷い出た一匹の羊をもし見つけたら喜ぶだろうとも語りました。聖書には「もし、それを見つけたら」と書かれていますが、ここは文字通りに理解すべきではありません。キリストは、迷い出た羊を必ず見つけ出す。命懸けでその一匹をキリストは見つけ出すと語っています。どうして九十九

匹の羊を山に残しておいて、迷い出た一匹の羊をキリストは命懸けで見つけ出そうとするのでしょうか。九十九匹を山に残して、その一匹に命懸けになるほどの価値は、常識的には分かりません。仮に無事に見つけ出して「さあ、群れに戻ろう」と言ったところで、その羊は素直に聞き従うのでしょうか。余計なお世話だ、構わないで欲しいと言われることもあるでしょう。

教会には、「牧会」という言葉があります。言葉の定義は多様であり、時代と共に、またそれぞれの教会の伝統や規模によっても、牧会のあり方にはさまざまな理解があるようです。牧会について、神学者トゥルナイゼンは「余計なお節介をすることだ」と語っています。私たちも、人から何か言われたり何かされたりしたとき、余計なお世話と不快感を抱いた経験があるのではないのでしょうか。そのような時、自分は余計なお世話と思われたくない、余計な手出しはしたくないと気をつけます。ところが、牧会とは余計なお世話をすることなのです。もちろん、余計と思うのは人間の目から見てのことです。「これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」のです。だからキリストは、羊を捜しに行きます。気をつけて歩いているつもりでも、簡単に道に迷ってしまう。一番安全な場所であることを知りつつも、御言葉のもとから、教会から迷い出てしまうのが私たちです。羊飼いであるキリストに、お世話をしていただかなければ、私たちは簡単に滅びに向かってしまう者なのです。このありがたい神の恵みに、気付かずにいるのが私たちではないのでしょうか。

10節の後半でキリストはもう一つ不思議なことを語っています。「言っておくが、彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである。」これは一人ひとりについている守護天使のことだと言われたりします。私たちが神にそっぽを向いているときでも、天使が私たちの代わりに、天の父の御顔を仰いでいる。神は私たちが勝手に迷い出ようとも、私たちとの関係を神の側から切ることがないことを示していると考えられます。キリストは教会に属する一人ひとりをただの人間の集まりとは見ていません。神の家族として見ています。迷い出た一匹も、よい羊飼いであるキリストにとっては、自分の命を懸けるに値する、かけがいのない羊なのです。

神の家族に対するキリストの説教が続きます。15節「兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで忠告しなさい。」キリストの求めは、兄弟が罪を犯したら、私たちは自ら行って二人だけのところで忠告することです。教会の中では、罪を罪として見分けること、罪を罪として特定することに難しさがあります。教会に集う一人ひとりは、自分の言動が御心にならなっていると思いついてからです。そういう人に罪を罪だと忠告するのは、この上なく難しいことです。どうやって罪を犯した人を再び教会に受け入れるか。誤った兄弟を滅びではなく、救いへと迎え入れるかという教会に対するキリストの問いかけです。

キリストは、慎重かつ厳格な態度で、罪を犯した兄弟と向き合います。兄弟が何らかの罪を犯したとき、その兄弟は、神に背いたことに気づくことすらできないでいる場合が多いからです。罪を犯したものは、むしろ具体的に名指しされ、罰せられ、裁かれねばなりません。そうしなければ、周囲にいる人が傷つけられてしまうようなことが起こりえます。罪が連鎖して、教会が破壊されてしまう、教会ごと滅んでしまうこともありえます。社会のすこやかな生命のために、厳しさが必要になることはあるでしょう。教会も秩序と教理を守るためには、時に厳しさが求められます。しかし、この厳しさは、神がその一人の人に無上の価値を掛けていることの証です。大切な一人を神と向き合わせるために、あえて厳しさを示す神の愛であると言っていいでしょう。父の御心は罪人が滅びることではない。そのために教会は、その人の罪を問わなければならない。罪を罪と呼ばず、そのままにしておく、その人はさらに厳しい裁きを受けることになるからです。しかしこの時、忘れてならないことは、その人の罪を問う自分もまた、罪の赦しが必要な罪人であるという決定的な事実があることです。私たちが罪人の一人として招かれ、迷い出た羊の一匹として捜し出され、キリストの体である教会に加えていただいた者たちです。そのことに目覚めるなら、キリストが私たちにしてくださったように、私たちが兄弟のところに自ら向かうのです。罪を犯した兄弟を再び教会に受け入れるために。誤った兄弟を滅びではなく、救いへと迎え入れるために。まことの兄弟を得るために、神の家族となるために、自ら出向き、自ら語りかけ、相手の心に聞くのです。そして、共に、主の御心にそれぞれの心を開くようにするのです。

19 節で「どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心をつなげて求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる」とキリストは語りました。心をつなげるとは、交響曲を意味するシンフォニーの語源となったギリシャ語が使われています。交響曲は、それぞれ違ったさまざまな音をだす楽器が、音色が違っても、響きあって一つの曲を奏でます。私たちの心は、さまざまな思い考え、色々なことがあって、それぞれです。しかし、お互いが天の父の御顔を仰ぐなら、天の父の御心によって、心の響きをあわせることができます。主にあって、聖霊の導きによって、神の言葉に聞き従うことによって、心をつなげるにあわせることができます。そのために、自ら行って二人だけのところで忠告するのです。私たちの心だけを満足させるわけではありません。私たちの正義感を満足させるためでもありません。主の恵みによって心をあわせるためです。ただし、それが聞き入れられなければ、「ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい」とキリストは語られました。一対二、あるいは一対三で圧力をかけようというわけではありません。二人の間でなされた会話が、本当に適切かどうか判断するためです。二人の間でなされた忠告が、より良いものとなるように配慮するために、連れていくのです。罪なのか、それとも罪でないのか、判断することも難しいと既に言いました。兄弟が罪を犯したとして忠告しているけれど、本当に忠告している人自身が正しいのかどうか。お互いが謙遜に、自分自

身を振りかえるための証人です。

私たちは小さい者であるが故に、許しあうことも忠告しあうことも、追放することも悩み苦しみます。具体的な問題としてあらわれてくる、私たちの罪と戦わなければならないからです。しかし、今日の箇所への二つの説教を通して、キリストが私たちに語りかけ、求めておられることは、救いのためのできる限りの努力です。命懸けで血を流すほどに私たちは罪と戦わなければならないのです。兄弟を滅びではなく、救いへと取り戻すためにはそれほどの覚悟が必要です。私たちの罪を贖い赦すために、キリストが恥をもちとわなないで十字架の死を耐え忍んだように、私たちも主に倣い従わなければならない。生半可なことではできません。けれども、キリストが私たちと共にいてくださいます。キリストが百匹の羊を一つにつなぐ絆、憎しみの中にある兄弟を再獲得するための絆となってくださいます。この絆は、ともに喜び、ともに泣くことのできる絆です。地上でもつながれ、天上でもつながれる永遠の絆です。自分の命ではなく、相手の命に心を向けることのできる絆です。キリストが命を懸けて教会に示し、与えてくださったものです。

キリストは語ってくださいました。約束してくださりました。「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」幸いなことに、この時、キリストが私たちと共にいてくださるのです。私たちの主、教会の主が共にいてくださるのですから、私たちが天の父の御心を行うことができるはず。迷い出た友を捜しに行くことができます。罪を犯した兄弟とも和解して、さらに強い絆を固く結ぶことができるでしょう。そのことによってまた、私たち自身も救いへと導かれることでしょう。私たちは誰一人、滅びることはありません。今この時もこれからも、あのナザレのイエスが私たちと共にいてくださいます。

祈りましょう。

聖なる神。御名によって祈る私たちと共にあなたがいてくださることを感謝します。キリストが、私たちの只中で生きて働いて、私たちの絆となってくださることを知りました。重ねて感謝いたします。私たちが、その恵みを受けて、誰一人滅びることなく、あなたの子として一本の木となって、共に生きることができるよう。今、試練にある私たちの群れが、この苦難を乗り越えてますます主にある喜びにあふれた群れとなることができますように御言葉が支え、聖霊が導いてください。主の御名によって祈ります。アーメン。

讃美：讃美歌 397

献金

主の祈り

黙禱